

---

## グスタフ・クリムト作《哲学》における知の重層的イメージ

---

《哲学》（1900-1907、1945年に焼失）は、グスタフ・クリムト（Gustav Klimt, 1862-1918）がウィーン大学大講堂天井装飾の一部として制作した作品群に含まれるが、注文主体であった大学関係者からの批判を受けて天井への設置を取り下げ、単独作品として最初に一般公開された1900年、当時の鑑賞者からも厳しい評価を受けたことで知られる。これら一連のできごとは、本作品に含まれる容易には理解しがたい彼独自の発想や問題意識に何よりも起因し、それゆえ本作品は、それまで斬新だが正統な歴史画や寓意画をこなす人気壁画装飾画家として歩んできたクリムトが、安易な理解を拒む象徴主義への移行を決定的になし遂げた画期に位置づけられる。本発表では、先行研究である程度解明された受注から完成までの構想の変遷を、残された習作の検討を通して辿るとともに、彼への刺激剤を、彼が積極的にアプローチした新しい芸術運動や周囲の視覚文化に探り、本作品における彼独自の発想や問題のひとつが、その主要モチーフである知の重層的イメージにあることをあきらかにしたい。

先行研究を三つの観点から整理するなら、第一に、依頼主とクリムトとの契約を、公式文書に基づき時系列的に再構築し、当時の新聞・雑誌に基づく受容状況の検証をしたもの（Alice Strobl, 1964）、第二に、モチーフの源泉を特定したり、《哲学》の構図全体を形式的観点から分析したもの（Johannes Dobai, 1967、Marian Bisanz-Prakken, 1978等）、第三に《哲学》の図像学的検証のために同時代の思潮や文学に言及するもの（Carl E. Schorske, 1980、Timothy W. Hiles, 1998、Astrid Kury, 2000等）がある。これらの研究の大半が依拠するA.シュトローブルの全4巻からなる *Gustav Klimt, Die Zeichnungen*（1980-1989）は、現存する素描の徹底的な収集と整理を行ったものとして非常に重要である。ここでは、彼女の研究に基づいて、《哲学》の下絵から完成作に至るまでの制作過程を時系列的に追いながら再検証し、デューラーの《メレンコリア I》を思わせる最初の習作に着目することで、知のイメージの重層的形成過程を論じる。

また、《哲学》の第一構想において、下絵に描かれたそれぞれのモチーフが、「知恵の寓意像」、「謎の象徴としてのスフィンクス」、「愛し合う若い男女」として描かれたものであると理解し、とくにスフィンクスに関して、当時の思潮や視覚文化を掘り起こしながら、知の重層化に寄与するものであったことを指摘する。そして《哲学》は、当初から依頼主が求めたように知の寓意画として構想されたが、その暗い色調に対する修正意見に応じて準備された第二構想において、同時代の芸術運動から刺激を受ける中、クリムトが人間の肉体の内側にある観念的世界や目に見えない神秘的存在を意識するようになり、伝統的なモチーフや色彩の独創的咀嚼を通して、象徴主義的に知を解釈するようになった経緯をあきらかにする。